

## 悪左衛門

花巻は矢沢の島に、そのころ、悪左衛門という百姓がいた。この男、その名にそむかぬしたたかな者であつたらしい。

娘が二人あつたが、こともあるうに、その姉には八兵衛、妹には五郎兵衛という男名前を付けてすましこんでいた。

その姉娘を嫁にほしいといつてきた者がある。仙台領水押村（いま北上市口内）の、その名も同じ悪左衛門である。島の悪左衛門は、それを承知した。

その祝言の日取りも定まり、姉娘を送つて、悪左衛門夫妻と妹娘とが連れ立つて、水押に出かけた。折しも陰曆十二月も寒中のこととて、道中にはひひとして雪が舞つていた。それなのに、四人ともに、着ているものといえば、夏物のひとえの着物一枚だけであった。

一行を出迎えた水押の悪左衛門のほうもまた、さるものである。この極寒のさなかというのに、家の戸や障子はことごとく開け放つてある。そして、出された膳のものはみな、前夜から軒下に

置いて、かちかちに凍らせたものばかりである。ところが、島の悪左衛門をはじめ四人の者は、これはうまそうだとばかり、それを食べた。そして、その後、扇を使いながら、  
「どうも、この家は暑いな——」  
と言つた。

あくる年の夏のことである。陰曆六月の土用といえば暑さのさかりに、島の悪左衛門は、婿の悪左衛門を招いた。

家の戸、障子はすべて締めきり、火鉢をみな持ち出して、それに炭を真っ赤におこしている。その中に、主の悪左衛門は綿入れを重ね着して座り、あれこれと婿をもてなした。出される料理はみな、いま煮あがったものばかりで、酒にも熱くかんがついている。婿の悪左衛門は、たらたらと汗を流しながらちそうになつた。

その後で、主はこう言つた。

「風呂がちょうど煮え立つてゐるが、どうだ、はいらぬか」。

それを聞くと、婿の悪左衛門はどうとう首を横に振つて、まいつた、まいつたと言つた。

そのころ、大迫（稗貫郡大迫町）に、菊沢伊兵衛という名だたる盜賊がいた。花巻城から捕り手の役人が出向くことになり、その先立ちを島の悪左衛門に仰せつけられた。悪左衛門は、これ

を聞いて大いに喜び、そして言上した。

「恐れながら、その伊兵衛めは、この私一人できつと召し捕つてまいります。ぜひ私にその役を仰せつけください」

願いはいれられた。悪左衛門はただ一人で、大迫の在に伊兵衛の隠れ家を尋ねていった。

案内を請うて、その家の内にはいった悪左衛門は、伊兵衛に言った。

「私ことは、島の悪左衛門ともうす者である。この辺りを通りすがりに、お近づきを得たくて参上いたした」

そして、また、

「ところで、いまひじょうに腹をすかしておるので、ぶしつけながら一飯をふるまつていただけまいか」

「それはたやすいことだ」

と伊兵衛は言つて、すぐに飯の仕度をした。しばらくあつて、食事も終わると、悪左衛門は改まつて言つた。

「私は、実はお上から仰せつかつて、貴殿を召し捕りにまいつた者である。貴殿も名を知られた仁であるからには、ぜひおたしなみのほどを拝見したい。そのうえで召し捕りもうそう」

それを聞くと、伊兵衛は、「心得た」とばかり、その場から飛鳥のように天井に飛び上がつた

かと見ると、梁の上に両足を踏まえて、

「これへ、これへ」と手招きした。

悪左衛門が、懷中から取り出した手裏剣をはつしと投げつけると、ねらいたがわず、それは伊兵衛の右の二の腕に食い込んだ。たまりかねた伊兵衛は、もんどりを打つて天井から落ちてきた。悪左衛門は、伊兵衛を捕らえると言つた。

「まったく役にも立たぬたしなみごと。私といっしょに来たがいい」

伊兵衛を拉致して花巻に帰つた悪左衛門は、ことの次第をお上に報告した。伊兵衛は、そのまま坂の下の獄舎につながれた。

この伊兵衛の持つていた刀は、白さやで樺皮を巻き、柄は藤皮をもつて巻いてあつた。この刀は、伊兵衛召り捕りの褒美として、悪左衛門に下げ渡された。このときに悪左衛門は苗字蒂刀を許されている。

なにしろお上からの頂戴物ちょうどいとあつて、それからの悪左衛門は、いつもこれを差して歩いた。

そのうえ、せつかくの刀差す身が従僕のないのもおかしいということで、新たに四郎という下人を雇い入れて、これに足高草履を持たせて歩いた。

その後、死罪に決まつた伊兵衛は、悪左衛門の勝手はからいということで、獄舎を出された。悪左衛門は、仲小路（いま花巻市仲町）入り口の石橋の辺りで、これを抜き討ちに斬つて捨てた

という。

また、あるときのことである。

町に出た悪左衛門は、舟場の辺りで、道の傍らにいた乞食座頭こじきざとうに取りすがられた。悪左衛門が、「あづき餅のほかには、何もない」

と言うと、その座頭は、

「あづき餅ならば、それこそ、われら大の好物である。ぜひにもくだされたい」と、ぬけぬけと言うのであった。悪左衛門は、

「しかとさようか。ならば、そのあづき餅を、ぞんぶんにふるまつてやろう」と言つて、ぎらりと例の腰の物を抜き放つた。同道していた者は、あわててとどめようとしたが、悪左衛門は、

「かような者は、後生のためにこうするのが一番だ」

と言つて、いきなり胴斬りにしてしまつたということである。

ところで、悪左衛門は、いたつて背の低い男で、身の丈が四尺五寸（約一三六センチ）ぐらいしかなかつた。ところが、拝領した伊兵衛の差し料はなかなかの長刀であつたので、悪左衛門は、

その刀のこじりに車を付けて差して歩いていた。

これを見て、

「身にもそぐわぬ長刀、何の役に立つものか」と嘲笑した者があつた。

これを聞いた悪左衛門は、黙つてはいていた足高の下駄を宙に蹴り上げると、その落ちかかるところを抜く手も見せずに真っ二つに断ち割つてから、

「身にはそぐわぬとも、これこそは、悪左衛門の手にはよくかのうた刀よ」と声高に広言した。

そしてまた、軽やかにきしむ刀のこじりの車の音を後に残しながら、悠然と歩み去つたということである。

（花巻市矢沢・同花巻と北上市口内および稗貫郡大迫町）